2011年10月9日 カトリック新聞

〈1928年3月26日第三種郵便物認可〉 THE CATHOLIC

岩手・釜石ベースで心のケアのチームで働く

扉をあけて 元気さん

吉田 俊雄（よしだ としお） さん

「シスター高木（慶子／援助修道会）が7月に釜石で講演し、心のケアのコアになる人が必要、ということになって」

すぐ釜石に来てみたところ、避難所から仮設住宅に移る時期で、「自分の悲嘆に向き合うというのはこれから」と感じた。8月から隔週で1週間ずつ釜石に入り、心のケアのボランティアをする。

98年に息子が急逝。「自分は息子のことを知らない仕事人間。〝仕事と家庭とどっちが大事？〟とよく言われていたことを思い出し、怒りを覚えました。それは比較すべきことじゃない。悲嘆の中で怒りを覚えるのは自然なことだと、後で学びました」

倒れて3週間、意識が戻らず亡くなった息子のメッセージを受け止めて生きていこうと自覚した。「その直後、佐藤初女さんとシスター高木に出会いました。佐藤さんは会っただけで言葉が要らなかった。すごい安心感。ただ存在することのすごさを感じました」

8年前に61歳で職場を定年退職。妻の紀美子さんと共に、高木修道女が主宰する生と死を考える活動に参加。家族を亡くした人たちのグループにかかわる。また佐藤さんが青森で行う「森のイスキア」に賛同して、自宅を開放し「小さな森東京」も始めた。「聴くことの大切さ。自分が新しい歩みに入っていく。傾聴は企業社会の中ではないことでしたから。人としての根源的あり方がそこにあるような。ビーイングそのものの生き方（何かをするでなく、存在自体を大事にする）になっていないと、聴くことはできないと気づきました」

さまざまな出会いに「運ばれて」、2002年に夫妻で受洗。「呼ばれたら受ける、その生き方が僕のテーマ。今回も〝はい〟と言おうと」

被災地、大槌町（岩手）の町が流された跡を見た体験が大きい。「ここで亡くなった多くの愛する人が復活し、共にいてくれると実感できて初めて、本当の癒やし、本当の復興が始まる。これまでの息子と私の歩みを振り返ると、それは相当の長期戦になります」

「奉仕のない人生には意味がない。犠牲のないのは奉仕じゃない」 69歳